



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.87

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2015年10月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

ジャズの聖地を巡礼する「外山喜雄&セイントズと行くニューオリンズ・ニューヨーク“サッチモの旅”」は今年、何と31人が参加し、7月29日から8月8日までまるで夢のような11日間を過ごした。連日のように猛暑に襲われていた日本を離れて、またまたあの灼熱のニューオリンズへ…と思いきや気温も湿度も和らいでいて、それなりに快適。特にニューヨークでは、避暑地にでもいるような涼やかな風が頬をなでる日もあって、ちょっぴり驚かされる。外山夫妻ではないが、「ちゃんとポップス(サッチモ)が見守ってくれているんですよ」。では、ご報告！

(小泉良夫)



(写真上) サッチモ・サマーフェストのメインステージで演奏する外山喜雄とデキシーセイントズ

＝7月31日

(写真左) ルイ・アームストロング国際空港に一行を出迎えてくれたTB Cブラスバンドと外山夫妻。東京・九段ライオンズクラブ会長、松村善一さんから贈られたサッチモの日本手ぬぐいを開き、みんな大喜び

＝7月29日。ツアー中、この手ぬぐいが大受けで、受け取ったみなさんは本当に大喜びだった。松村さんありがとう。

この号は 2015「サッチモの旅」特集です

TBCブラスバンドに迎えられてルイ・アームストロング国際空港入り 到着ロビーを揺るがすサウンド…踊り出す乗客の女性も

29日(水)午後8時過ぎ、ちょっぴり遅れてニューオリンズ

のルイ・アームストロング国際空港に到着し、我々がまだコンコースを歩き始めたばかりなのに、待ちかねていたTBCブラスバンドの10人が高らかに演奏を開始した。毎年顔を合わせていてもう10年の付き合い

いとなるトランペッターのショーン君…いやいや、今や26歳というからショーン・ロバーツさんと呼んだ方がいいのかも…が



笑顔を見せる。毎年のようにガイド役まで務めてくれる日本

人ドラーマのまゆみさんもドラムで出迎え。外山夫妻、松本耕司さん(tb)も加わる。到着ロビーに次々と降りたって来る乗客のみ

なさんは大喜び。中には踊り出す女性も…何といってもここはジャズの街なのだ！

大うけだった「サッチモの日本手ぬぐい」 ニューオリンズ、ニューヨークでも配布！

外山夫妻がWJF21周年の記念パーティーでも、お土産として参加者にプレゼントしたサッチモの日本手ぬぐいを空港で歓迎してくれた TBC ブラスバンドのみ

なさんにも手渡す。みんな、こ

れを広げて大喜び(TOPペー

ジの写真)。この手ぬぐいは、

WJF設立21周年記念パー

ティー“感謝の集い”のさい、

東京・九段ライオンズクラブ

会長の松村善一様から寄贈

(500枚)され、ご参加の皆様

にも配布したもの。今回の

「サッチモの旅」でも大好評

で、サッチモ・サマーフェスト

VIP、ジャズ博物館、ルイ・ア

ームストロング・ハウス・ミュ

ジウム館長、マイケル・コグス

ウェルさん、ヘレン・メルさ

んらにもプレゼントし、みなさ

さん、大変喜ばれていた。

翌30日(木)は、朝からミ

シシッピ川の対岸にあるランドリー・

ウォーカー高校へ。なんと！入り口

に高性能の“拳銃探知機”が新設さ

れていると聞いてびっくり。



50人超のバンドが大音響の歓迎 トランペットなどを今年もプレゼント

バンドルームではディレクター、ウィルバート・ローリンズ先生(写真左)率いる50人超のブラスバンド部員が、部屋を揺るがすような大音響で

我々を迎えてくれた

(写真左の上段)。セ

インツも加わる(同

下段)。楽器のプレ

ゼンテーションや

バンド演奏、終わ

って全員クレオー

ル・ビュッフェまで

ご馳走になってし

まった。

食事の時、驚い

たのは、隣のテー

ブルについていた

家族がみんなロー

リンズ先生一家だ

ったこと。お母さん、

ローリンズ夫人、ま

だ幼いお子さんた

ち(女3、男1)=写真左。そんなことま

ったく知らなかった。先生に尋ねる

と、照れくさそうに頷く。

終わって、ジョージ・ルイスのお墓

参り。今年は中村美代子さんが花



束を添え、外山さんがお線香までくゆらせた。墓前でセイントが演奏(写真右)する中、坂下泉さんらがせっせとお墓の上を覆っていた雑草を丁寧に取り除いていく。



ジョージ・ルイスの墓前で演奏、献花湖では感動的な鈴木芳郎さんの散骨

ミシシッピ川の大橋を渡って北へ。ポンチャートレイン湖ウエストエンドへ回る。ここで今年4月に急逝した鈴木芳郎さんの感動的な散骨(灰)の“儀式”。

この後、“南部のハーバード大学”ともいわれる名門のチューレン大学(St. Charles Ave.)にも立ち寄った。

ここには立派なジャズ資料館(ウィリアム・ランソン・ホーガン・アーカイブ)があって、以前、ここでWJFスタッフの渡

辺研介さんが恵子さんのバンジョー物語の詳しい資料を“発掘”、会報77号に書いてくれたこともあっ

た。ジャズ史の研究者、ウィリアム・ラッセルがこのバンジョーのことを手書きのイラスト入りでこの資料室に詳しく書き残してくれているのだ。

一行とともに恵子さんも当日、訪問するとあって、展示室のガラスケースに、前もってちゃんとその資料が展示さ



鈴木さんの遺影を掲げてポンチャートレイン湖に遺灰を撒く外山夫妻



チューレン大学のジャズ・アーカイブに展示された恵子さんのバンジョー資料を見つめ、みなさんに秘話を披露する外山夫妻(左)

リバーボートでセイントも加わりジャム・セッション 川面に遺灰が撒かれた瞬間ドーンと花火が…

夜は、外輪船のリバーボート「ナッチェス」号に乗ってのジャズクルーズ。出演はデュークス・オブ・デキシerlandで、リーダーのケビン・クラーク(tp)は健在。この日は時折、雨に見舞われたこともあって当初、バンドは階下ディナールームの室内でやっていて、ディナー券を買っていない我々は、なんだか閉め出されたような格好でがっかりさせられていた。そんな時、あの“力強い助っ人”まゆみさんが



「日本からのお客さんが、上で31人も待っているのよ。上でやって下さいよ」とプッシュ、バンドを上につ

れてきてくれたそう。演奏が続けられ、しばらくするとセイントも全員加わって9人によるジャム・セッションが繰り広げられた。『キャバレー』『聖者の行進』で最高の盛り上がりを見せる。シーラ記者の記事(後述)でも触れられているが、外山さんはあまりに熱中、ノリまくっていたので鈴木芳郎さんの遺灰の散布を忘れていた。終わってから慌ててミシシッピ川に散布すると、その瞬間にドーン！ここでは何とも珍しい花火が対岸から次々と打ち上げられた。「鈴木さんが昇天したようだ」と外山さん。この“慰霊の花火”もサッチモのイタズラ？ みなさん、しばし夜空を見上げる。



このあとそれぞれが思い思いの夕食へ。真夏の生ガキ！ 焼いたもの、揚げたものもある。レッド・ビーンズ、ガンボ、ナマズのフライなど地元料理に舌鼓、ニューオリンズの夜を満喫した。

大農園「オーク・アレー・プランテーション」へ 樹齢300年の木々、大邸宅を背景にパチリ

31日(金)は、バスで1時間ほどの川沿いにある、これこそ南部の典型的な大農園というべき「オーク・アレー・プランテーション」へ。居間、書斎、寝室、客室、子供部屋…伝統的な衣装を身につけた女性のガイドさんの案内で目を見張る豪華な邸内を回る。面白かったのは、室内の鏡に黒いスクリーンが掛けられていたこと。「鏡に魂を吸い取られないようにしているのです」とか。廊下の突き当たりにきて、ガイドさんが「さあ、このドアを開けると、目前に世界一素敵な光景が広がりますよ」と、さっと扉を開け放つ。…と、薄暗い廊下にはぱっと真夏の陽光が差し込んで、巨大なオーク(カシ・ナラ類) 計28本が通路を挟んでミシシッピ川の土手まで両側にどっしりと続く。樹齢300年とか。寿命は600年だそうでまだ半分しか年をとっていない。ま、上の写真を見て頂きましょう。

ここで南部料理の昼食をバイキングでしっかりとる。

いよいよハイライト「サッチモ・サマーフェスト」 ジャズ博物館に鈴木さんからの\$1000 寄贈

市内に戻って、この日から始まった「サッチモ・サマーフェスト」会場、旧造幣局へ。今年からフェストの入場料(1日5ドル)を取るようになって、一行それぞれ3日分のリストバンドを購入する。入場料を払わずに周辺道路に大きな折りたたみ椅子を広げて、ちゃっかりジャズを楽しもうとする人たちが周辺も大賑わいだったが、会場内の売店では、「お客さんの入りが悪くなって売り上げが落ちてしまったよ」と嘆きの声も。我々は2階のジャズ博物館へ行って、スタッフに鈴木さんからの1000ドルをとサッチモの手ぬぐい



を贈呈する(写真左)。1992年に一緒にジャズツアーを始めた鈴木芳郎さん、まる

で今年のツアーの“主役”といった感じでしたよ。

夜は、ライブハウス「スナッグ・ハーバー」にセインツが出演(写真右下)。2階にも客席があるなかなか落ち着いたあ

るクラブ。満員のお客さんを集め、セインツは午後7時過ぎから、9時過ぎまでの2セット。まゆみさん(ds)やダリル・シャーマンさん(p,v)も飛び入りして彩りを添えた。

8月1日(土)は、いよいよセインツにとってのサ

ッチモ・サマーフェスト本番。午後4時半から5時45分まで、メインのレッド・ビーンズ&ライスリー・ユアーズ・ステージ



に出演。外山夫妻も感激していたほど、聴衆のみなさん、熱い声

援と温かい拍手を送っていた。何とんでも外山さんはお客さんを引き込んで、乗せるのがお上手。みなさん、ステージと一体になって楽しんでしまうのだ(TOP ページに写真)。

演奏曲は「南部のたそがれ」「ハロー・ドーリー！」「ウェストエンド・ブルース」「キャラバン」「ケイコズ・ブギ」「バーガンディー・ストリート・ブルース」「バイバイブルース」「ハイ・ソサイティー」「聖者の行進」…と盛りだくさん。

セント・オーガスチン教会での「ジャズミサ」 場内に高らかに鳴り響く外山さんのペット

2日(日)は、セント・オーガスチン教会でのジャズミサ。外山さんはゴスペル隊やトレメのブラスバンドと演奏。松本耕司さん(tb)も加わる。終わってブラスバンドは、外で待機していた長老、グランド・マーシャルを先頭に他のブラスバンドやらセカンドラインを従えて、猛暑の中(今年はそれほどではなかったが)サマーフェスト会場まで延々とパレード。我々は冷房の効いたレストランに逃げ込む。以前、熱中症にかかってしまったツアー同行者も出たが、日本の猛暑に我々も大分慣れてきたなあ。でも、油断は禁物、水分と塩分の補給！

パレードが終わってホテルに引き上げていたら、あの

のショーン君が何とも可愛い長女(2012年8月18日生ま



中央の奥で立ち上がりトランペットを吹いているのが外山さん



パレード主役のグランド・マーシャルを先頭に教会を出発。外山さん、松本さんも続く(右)



すっかり大人になったジョン・マイケル(右から3人目)との再会を喜ぶ外山夫妻ら“昔なじみ”のみなさん

れでまもなく3歳)を連れて外山夫妻を訪ねてきた。名前を聞くと「サナエ」ですって。日本名のサナエちゃんかと思ったら、「Senaa」と綴るそうだ。ホント、可愛い。お父さんのショーン君が空港に我々を迎えにきてトランペットを吹いているところをビデオカメラの小さな液晶画面で見せてあげたら、ますます可愛い眼で見つめていた。大きくなったとき

に再会できたら…と思うと何とも楽しみ。

(終面に写真)

ジョン・マイケルがやって来た！ あの子がホント、大人になって

午後8時からサマーフェストのフィナーレ。例年のようにトランペッター全員集合！何とあのジョン・マイケルが3年ぶりでやってきた。彼は2012年、ティピティナスのチョーザン・ワン・バンドの一員として来日、東北の大震災被災地を回っ

たこともある。最近、夏はボストンのパークリー音楽大学での夏期講座に出ていて、しばらくご無沙汰だった。満面笑みの

お母さん、アンジーにも再会できた。

続いて夜はプリザベーション・ホールで、オールスターズによる「サッチモ・トリビュート」。浅草に何度も来ていてセインツの粉川忠範さんがニューオリ

ンズに來られなくなったとき、セインツの一員として共演したり、スチームボートのデュークス・オブ・デキシerlandに出ていたり、あちこち飛び回っているトロンボーン奏者、フレディー・ロンゾ

が出ていた。飛び入りのセインツとは息もぴったり。外山さんとユーモラスに「君、微笑めば」



サッチモ・サマーフェストのフィナーレは、全員集合のサッチモに捧げるトランペットバトル＝右から外山さんとジョン・マイケル

「ロッキン・チェア」でボーカルを掛け合い、会場を沸かせた。
ひげのベーシスト、リチャード・モーテンも何度も浅草のニュ

ーオリンズ・ジャズ・フェスティバルに来ている、お馴染みの
ベテランだった。

墓参、プレゼント、クルージングにショッピング、グルメ、もちろんジャズ…

今年もやってきました「ルイ・アームストロングの“お盆”」 ヤンキースタジアムへ11人！ ヘレン・メルルさんとお食事組も

3日(月)、ルイ・アームストロング国際空港からニューヨークへ。降り立ったのは、J. F. ケネディー国際空港。いつもは国内線だとラガーディア空港着だが、ことしはなぜかJ. F. K. 空港だった。空港からウエリントンホテルにチェックインする時間までバスに乗ったままずっと市内見学。で、この日はほぼ移動だけ。夜はさっそく5ブロックほど歩いた和風レストラン「サッポロ」で久々の日本酒とビールでのどを潤す。餃子にラーメン…枝豆もあったけれど冷や奴がメニューから消えていたのはちょっとがっかり。それでも、かなり飲み過ぎてしまった。

サッチモの誕生日にサッチモ邸へ、お墓参りも 鈴木芳郎さんからの寄金やらプレゼント手渡し

4日(火)は、サッチモの114回目の誕生日！ クイーンズ区コロナの旧サッチモ邸「ルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム」(LAHM)へ。館長のマイケル・コグスウェルさんが迎えに出てくれていた。そうなんです、いろいろお渡しするものがあるのです。まずはサッチモの日本手ぬぐい、そしてシゲ藤田さん撮影の島津貴子さんとサッチモのサイン入りダンス写真など3点(別項で撮影秘話)、そ



れに鈴木さんの遺志で寄贈された1000ドル。コグスウェルさんが感動と喜びに顔をほころばす(写真上)。

毎度のことだが、二手に分かれて館内見学。リフトのついた階段を上ると、突き当たりに全面鏡張りの浴室。金属製の部分はすべて金という豪華版。世界を巡ったお土産の記念品で飾られた居間、サッチモが息を引き取った夫妻の寝室、食器や備品をすべて隠し込んで何となくすっきりしたキッチン、天井まで2段作りのウォーキングクロゼット、



サッチモ邸玄関先の、あの階段にみなさん集まって全29人が記念写真。サッチモが横でオー、イエーですって。(参加者みなさんのお名前は13ページに掲載しました)

オープンリールのテープレコーダーなど当時としては最高級のオーディオ装置を備えた豪華な書斎…興味津々、何度きてもまったく飽きさせない。

お隣には広々とした日本庭園。館長さんが精魂込めて

修復しており、うっそうとした木々の回りをリスが跳ね回っていたこともあった。小さな池もあり鯉が泳いでいる。サッチモ



は落ち着いたこの地が何とも気に入っていたようだ。彼のような売れっ子の超有名人ならもっともっと豪邸に住んでも良さそうなものだが、そのわりには意外に慎ましか。

玄関口に上るレンガ造りの階段…サッチモがここに座って近所の子供たちにトランペットを教えている写真(前ページ下段)でもよく知られていて、一行のみなさんも代わる代わる記念撮影。ならば全員まとめて集合写真もと1枚！(前頁)

サッチモ夫妻が眠るフラッシング墓地へ まさに『ルイ・アームストロングの“お盆”』

お土産の記念品もいろいろ買って、お次はサッチモ夫妻が眠るフラッシング墓地へ。去年はここにビデオ映像作家の Joel Schlemowitz さんが密着取材して、『Louis Armstrong Obon』(ルイ・アームストロングのお盆)というタイトルで14分の短編ドキュメンタリー映画を作った。これがニューヨークのジャパン・ソサエティー(JS)主催の日本映画祭「ジャパン・カツ」の招待作品となった。サッチモ邸からお墓への我々一行の“巡礼の旅”、外山夫妻のインタビュー…サッチモに憧れ、ニューオリンズでジャズ修行、楽器の寄贈、日米被災地のジャズ交流…たっぷり伝えられ、「お盆には、天国から故人がみんなお墓に戻ってくるんです。それで…」、サッチモにあいにお墓に向かう一行をとらえる。

今年も恵子さんら“フラワー・ガールズ”がゲート前の花屋さんで生花を買って、星条旗で飾られている墓前へ。外山さんがお線香まで用意してきた。セインツがここでも『ウエストエンド・ブルース』と『ハッピー・バースデー』を捧げる(写真右上の中央)。

今年の「ジャパン・カツ」でも、この『お盆』が話題となり、“優しく感動的な映画”として語り継がれるなど大好評を博していたという。

超人気のイタリア料理を堪能したあとは… 1920年代のジャズ、翌日はバードランド

ミッドタウンに戻り、今年も超人気のイタリアンレストラン「CARMINE(カーマイン)」のイタリア料理で昼食(写真右)。早々とワインにビール…料理は次から次とこれでもか、これでもか！ まったく食べきれません。帰りのバスは渋滞でほとんど動けなくなり、

観光は途中でやめてホテルに戻る。

夜は、ブロードウェイのレストラン「イグアナ」で食事とライブ。グラミー賞も受賞している、ヴィンス・ジオルダーノ率

いる1920年代のビッグバンドそのものの「ナイトホークス・オーケストラ」の演奏を堪能する。外山さんが飛び入りで加わり大喝采、バンドのミュージシャンからも温かい拍手が送られていた。「私たちもこのようなサウンドを目指しているのですが、なかなか…」とは、“ジャズの街”宇都宮から参加していたスウィング・ハード・オーケストラのリーダーでトロンボーン奏者の吉原郷之典さん。浦安から参加の会員、真崎晃郎さん、美那子さんご夫妻が



外山さん取材する Schlemowitz さんとその映像から

軽やかにステップを踏んでいた。

翌5日(水)の夜、バードランドでデビッド・オズワルド率いるサッチモ・トリビュート・バンド「ルイ・アームストロング・

エタニティー・バンド」の演奏を聴く。外山さんと、今度は恵子さんも飛び入りで演奏。ここでもワインを傾け、食事を楽しむ。

ニューヨークでは2日間、自

由時間もたっぷりあって、マンハッタンを巡る2時間のクルージングやら最上階の展望台までオープンしたワールド・トレード・センター(入場待ちが長蛇の列で上るのは断念)、



5番街でのショッピング、ブロードウェイでのミュージカル鑑賞(京都からの古川博さんは『マンマ・ミーヤ』と『ライオン・キング』の2つもご覧になっ

たという)、美術館巡り…と、とても回りきれません。

“球児”とヤンキースタジアムへ11人！ ヘレン・メルルさんと和食のお食事組も

6日(木)、甲子園球児だったセインツの藤崎羊一さんは毎年、ヤンキースタジアムやニューヨーク・メッツのシェイ・フィールド球場に出掛けているが、今年はなんと10人を引率してヤンキースタジアムへ。藤崎さんは引退し



たジーターのTシャツにヤンキースの野球帽…すっかり地元ファンに同化してしまった(写真上)。試合はヤンキースとレッドソックスのナイトゲーム。

「日本でいうと巨人・阪神戦といった好カードです」とこの幸運な巡り合わせに、にんまりの藤崎さん。ヤンキースが2-1で勝って球場を沸かせたことにも大納得！

一方、中村宏ご夫妻のお膳立てで、かつて“ニューヨークのため息”として日本でも一世を風靡したニューヨークの女性歌手、ヘレン・メルルさん宅を訪問、歓談したあと、近くの和風レストラン「ドングリ」でお刺身の盛り合わせなど、日本酒を傾けながら、とても外国とは思えない素晴らしい和食を賞味、話題も大いに盛り上がった(写真右上)。あまりに楽しい歓談だったので、帰国後またまたみなさんと再会し、ヘレンさんの代わりにお友だちのキャサリン・ホワットレイさんを交えて盛り上がってしまった。

7日(金)、帰国の途に着き、日付変更線を越えて8日(土)、全員無事成田着。ご苦労さま、本当に楽しかった。だから1度「サッチモの旅」に参加すると、みなさん病みつきになり、また行きたくなってしまうのです。さて、来年は？

帰国後、外山夫妻はメールでこんな感想を伝えてくれました。



ニューヨークでの2つのライブ上はイグアナ、下はバードランド



＜今年のツアーは、人数が31人と沢山になり、はたして十分なお世話をすることができなのか…また、いろいろなイベントやハプニングに満ちた、バラエティーに満ちた旅になるか、と心配になっていました。

でも、ふたを開けてみたら、今までの旅行の中でも、一番の盛り上がりで、いろんな意味で“バラエティーに富んだ”ツアーになったかと思えます。

ニューオリンズでの、私たちのバンドへの地元の皆さんの声援と熱狂は光栄で身に余るものでありました…ジャズライブ、コンサート共に、盛り上がり感激的で、参加の皆様、その中にいらっしゃって本場のジャズのノリと、本場の興奮を楽しんでいただけたことは、本当に嬉しいことでした＞

お2人とも、しばらく時差ボケとお疲れが抜けなかったとか。喜雄さん、恵子さん、本当にご苦労さま。お疲れ様でした。

シグさん撮影—こんな素晴らしいサイン入りレア写真があった！！

1963年4月…ダンスに興じる島津貴子さんとサッチモ

そしてもう1枚の写真中央のレディーはどなたですか？

朝日イブニング・ニュースで活躍されたシグ藤田さん(写真右)に、サッチモのレア写真を送っていただいたお礼の電話。その時シグさんがこんな秘話を話して下さった。(外山喜雄)

「あれはね、1963年の4月、昔のアメリカクラブのレストラン…アメリカの会社の日本支社長が主催したパーティーでね、ビッグバンドのリーダー、何とおっしゃったかな…その人が島津貴子さんをご存じて連れてきたんです。リーダーの奥さんは歌手で、サッチモと別の写真に写っている人です。僕も、カメラを構えて、サインをするサッチモを撮っているところが、鏡に映っているでしょう(写真右下)。

カメラは、キャノンですよ。みんなドイツのカメラを記者連中は使っていたけど、僕は何でも日本びいきで、電化製品も日本のモノしか使わない！サミー・デイビズも良く知っていたけど、そうでしたよ、キャノンの愛用者。彼に名刺をもらったら、アンバサダー・

フォー・キャノン(キャノンの大使)と書いてあった。彼は写真が趣味でね、自分のキャノン・カメラで撮った写真を、レコード

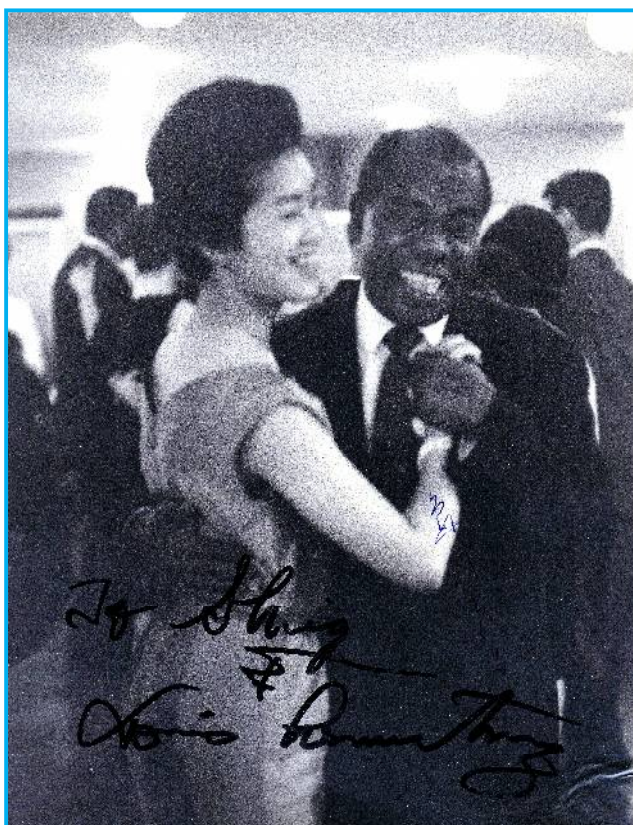


のジャケットに使ってた。

日本に来たときなんか、キャノンの工場まで行って見学してね、キャノンが感激して、カメラを贈呈したいといったんです。でも、とんでもない、自分で買います…と辞退したよ！　そういえば、あのビッグバンドのリーダーは、ナット・キング・コールもパーティーに連れてきたことがあった！　最近では、往年の歌手や芸能人が居なくなってしまって、本当にさびしいな…。あれ(注=2015年3月28日、銀座十字屋でのサインライブ)は、楽しかった！　最近、若いジャズマンは上手だけど楽しくない。

私は、昔から写真をたくさん撮っていて、市原悦子さんがまだ若くて、日生劇場で、50年前ですよ。アンドロマックというミュージカルに出たときの写真を撮っていて、六つ切りに伸ばして彼女にあげたんです。大変喜んでくれました！」

歌手のドリー・ベイカーさん、昨年、老後お住まいだったボストンで天国へ旅立たれた。彼女とも大変親しかったシグさん。私達もドリーさんとお付き合いを通じてもう40年近く存じ上げているシグさん。プレゼント頂いた大切な貴子さんとサッチモのレアショットを、今年のツアーでNYのサッチモハウスにお届けした！！

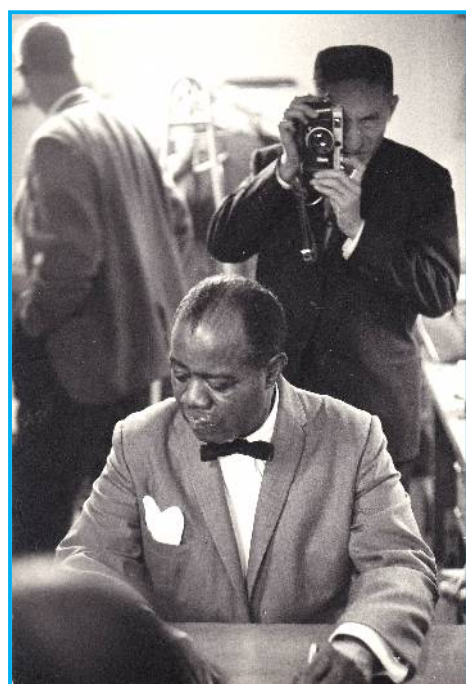


この写真では見えにくいのですが、貴子さんの右腕のところから万年筆で書かれた貴子さんタテ書きのサインが…



上の写真、中央のレディーはどなた？　バンドリーダーの奥様とか。これもレア！　ご存じの方がいらしたらお教え下さい！！

サッチモハウス館長のマイケル・コグスウェルさんに伝えたら、ジャパニーズ・プリンセスとサッチモのレア写真、オー・マイ・ゴッド！　と大喜びです。シグさん、いつまでもお元気で！！



長年にわたる外山喜雄・恵子夫妻の サッチモ、ジャズ、ニューオーリンズへの愛を讃える



外山喜雄さんは2015年7月30日(木)、ニューオーリンズのランディー・ウォーカー高校で夏季練習中の生徒たちのために演奏し、日本から同行のツアーの一行とともに学校での行事に参加して、楽器を寄贈した。
(タイムズ・ペキューン紙、シーラ・ストラウブ記者、photos by Brett Duke)

バンドとWJF会員らとともにやってきて 感謝の気持ちを込めて子供たちに贈る

毎年、外山喜雄・恵子夫妻はサッチモ・サマーフェスト出演のためにニューオーリンズを訪問し、必ず彼らのトラディショナル・ジャズバンドと日本ルイ・アームストロング協会のメンバー、そして贈り物をもってやってくるのが恒例になっている。



寄贈された楽器をローリンズさんに手渡す外山

今度もそれに変わりはない。

ランディー・ウォーカー高校のバンドルームで行われた楽器贈呈式を待つ間、私は机の上に置かれた寄贈用のトランペット数本、トロンボーン、そしてバンジョーをよく調べてみた。すべての楽器にメッセージが添えられていた。

＜この楽器はワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)Tokyo, JAPAN から贈られました。ニューオーリンズとサッチモ、そしてあなた方の国が私たちに贈ってくださったジャズへの感謝の気持ちを込めた、日本のジャズファンからニューオーリンズの子供たちへのプレゼントです＞

このメッセージこそ、まさに外山夫妻のすべてを物語っている。

毎年夏、私は外山喜雄とデキシーセインツが、この高校でいつも素晴らしいショーを見せてくれるのを楽しみにしている。ショーのフィナーレは必ずセカンドラインのパレードになる。子供たちはみんな夫妻が大好き。そして夫妻の、ルイ・アームストロングとジャズ、そしてニューオーリンズに捧

げる愛情が、彼らに伝わっていく。

夫妻に名誉ある同校スタジアム・ジャンパー… 「どんなに私たちが感謝しているか分かって！」

贈呈式の中で、バンド・ディレクターのウィルバート・ローリンズさんから夫妻に驚きのプレゼントがあった。名誉ある同校の頭文字をデザインしたスタジアム・ジャンパーだった(写真下)。

「いつも私たちにプレゼントを持ってきてくれて有り難うございます。私たちがどんなに感謝しているか、分かって頂きたいのです」。以前、アルジェ地区にあった2つの高校が合併する前にも、当時のオー・ペリー・ウォーカー高校のジャンパーをローリンズさんが贈呈したことがある。その時と同じように、喜雄さんは今回も贈呈式が終わるまでずっとこのジャンパーを着続けていた。

ニューオーリンズで暮らし帰国後WJFを設立し トランペッターと指導者は特別な絆で結ばれた

挨拶に立った外山さんは、第9区にあったカーバー高校で2003年に初めてローリンズ先生に会ったときのことを話した。ローリンズさんは同校のバンド・ディレクターだった

が、2005年ハリケーンで堤防が決壊し、学校は水没してしまって同校を離れた。2003年の訪問では、外山さんは同校の生徒たちのために39点ものピカピカの新しい楽器を持っ



てきてくれた——トランペットからチューバまであらゆる種類の楽器だった。

彼は、当時カーバー高校の生徒たちが使っていた楽器がボロボロだったので、驚かされたと語る。

「楽器のピストンがみんな壊れていたんです。この世で

初めて、世界にスイングすることを教えた街です。そこでこんなことがあるなんて…。ルイ・アームストロングと一緒に、皆さんが造りだした音楽に世界中がトリコになったんですよ」と彼。

私はその日のことも、楽器のこともよく覚えている。どの楽器を見ても、ほとんどがひもや粘着テープで補修されていた。その日、私は初めて彼がトランペットを吹き、尊敬してやまないルイ・アームストロングのしわがれ声で歌うのを聴いた。その最初の出会いで、私はこの日本のトランペット奏者と、ニューオリンズのバンド指導者が特別な絆で結ばれていることを直感した。音楽が若い人たちの人生を変え、救うこともできるんだという信念で、2人が結ばれているのだということ。

そして、それは私が初めて、なぜこの夫妻がニューオリンズで暮らすようになり、なぜ日本ルイ・アームストロング協会(ワンダフル・ワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF)を立ち上げたのかを知るきっかけでもあった。

ジョージ・ルイスの音楽に心を奪われた若い2人 ジャッフェのアドバイスで素晴らしい冒険の旅へ

夫妻がまだ大学生のミュージシャンだった1963年にこの物語が始まる。著名なクラリネット奏者のジョージ・ルイスがプリザベーション・ホール・ジャズバンドとともに日本を演奏旅行した年、若い2人はジョージの音楽に心を奪われた。

「そんなにジャズが好きなら、ニューオリンズへ来るべきじゃないのかって、バンド・マネージャーのアラン・ジャッフェが言ってくれたのです」

大学卒業後に2人は結婚し1968年、ジャッフェのアドバイスに従って彼らは素晴らしいアドベンチャーの旅に出た。住んだのは、バーボン・スリートにあった、ソニー・ボークレサン(外山注:クレオールの名士。息子さんが経営す

るボークレサンのソーセージ店は現在も有名)が経営する「カフェ・クレオール」のアパートの3階に入居した。

「窓は壊れていて、夜ともなるとプリザベーション・ホールからの音楽が聞こえてくるんです」と喜雄さん。

喜雄さんのトランペットの練習と恵子さんのバンジューの演奏が壊れた窓から外に流れていって、それを耳にした

ボークレサンから、もしカフェの中庭で毎晩やってくれたら出演料代わりに夕食を出してあげるよと言われた。「それで毎晩、私たちはクレオール料理を食べていたんです」と喜雄さん。

彼らは滞在中の5年間、ミュージシャンとして働き、プリザベ

ーション・ホールでジャズの巨匠たちに学び、時には彼らとともにシットインさせてもらいステージにも立った。そして5年後、日本でトラディショナル・ジャズを演奏するために帰国した。

「ジャズは日本でとっても親しまれているんです」と喜雄さん。

マルディグラの祭りで見た“ジャズの故郷”の荒廃 古い汚れた楽器で行進、子供達は拳銃を持ち…

20年後、マルディグラのお祭りを楽しむためにニューオリンズに戻ってきた2人は、高校のバンドが古い汚れた楽器で行進しているのを目にし、10代の子供たちが拳銃を持っていることを知ってショックを受けた。そこで彼らは、子供たちの手に銃ではなく、新しい楽器をもたせようとWJFを立ち上げた。「彼らがトランペットを手にしたら、ルイ・アームストロングのようになるかも知れないって思ったのです」と喜雄さん。それ以来、彼らは800点以上の楽器をニューオリンズの学校の子供たちに届けるなど、この街のために多くの素晴らしい貢献をしてきた。

今年のサッチモ・サマーフェスト開幕を翌日に控えたあの朝、セカンドラインを演奏しバンドルームを巡る彼らの行進を見たとき、彼らが47年もの間、ニューオリンズへの愛を強く持ち続けてきたこと、それがなんとも素晴らしいこと



だと思った。

「ここでやっていることは子供たちを何とかしたい。それがすべてなのです」とローリンズさんはプログラムの最後に聴衆に向かって言った。「そして、まったく別の国からここに来られた素晴らしいご夫妻が、悪戦苦闘する私たちを助けてくださっているんです」。

父も愛し続けたジョージ・ルイスの墓前へ 賛美歌が流れ雑草を取り除く一行に感動

この日の昼下がり、私は外山夫妻、それにグループの皆様方と

ジョージ・ルイスのお墓に出かけた。彼はミシシッピ川の西岸、ニューオリンズの対岸にあるグレートナ



ジョージ・ルイスの墓前で賛美歌が演奏される中、草むしりをする参加者たち

市のマクドノビル墓地に埋葬されている。外山さんら一行は、ニューオリンズにやってくるきっかけとなった、このクラリネット奏者に敬意を払って毎年ここにやってきているの

だ。私も、私の父のためにも是非、墓参に参加したいと思った。ジョージ・ルイスは父の大好きなジャズマンの1人だった。父と母は、毎年冬になると、イリノイ州の厳しい寒さを逃れ、ニューオリンズで至福の1週間を過ごした。毎晩2人はプリザベーション・ホールに通っていた。必ず最後にレコードを買って家に持ち帰り、翌年1月のニューオリンズ行きまで2人で楽しんでいたものだ。

私は夏の間、玄関先から私の寝室に流れてくる、ジョージ・ルイスと“スイート・エマ”バレットの音楽を耳にして育った。私の大学時代のある年、父が、日本語が上の部分に書かれている1枚のポスターを家に持ち帰ってきたことがある。中央にはプリザベーション・ホール・ジャズ・バンドのイラスト。下の方に“ジョージ・ルイス——ニューオリンズ”の文字。私は40年後、外山夫妻と会って初めて、それが

ジョージの日本ツアーの際のポスターだったことを知った。

ジョージ・ルイスのお墓で、デキシシーセインツは『主よ、御許近くに』と、ルイスの最も有名な曲の1つ『バーガンディー・ストリート・ブルース』を演奏した。

＜彼のクラリネットから流れる、優しく、魂のこもった、美しいサウンドよ、永遠なれ＞墓碑にはそう刻まれていた。そして、私たちがこの優しく魂のこもったクラリネットの曲に耳を傾けている間、ファウンデーションの一行が手を伸ばしてお墓に生えた雑草を引き抜いているのをみて、私は感動させられた。

初めて知った恵子さんとあのバンジョーの秘話 せめて夫のバンジョーに日本を見せてあげて！

お墓を後にするとき初めて知ったのだが、外山夫妻はジョージ・ルイスが埋葬された1969年1月の雨に濡れた朝方、その葬列に参列していた。また、恵子さんが演奏していたバンジョーは、ジョージお気に入りのバンジョー奏者、ローレンス・マレローの未亡人から昔譲り受けた楽器だった。

「ローレンス・マレローが亡くなったあと、世界中のバンジョー奏者や収集家はそのバンジョーを手に入れようとしていたのですが、夫人はどうしても手放したくなかったんです」と喜雄さん。それでも、未亡人のエロイーズさんは、

若い日本の女性がバンジョーを探していることを知ると、それを恵子さんに譲ってくれたという。「ローレンスは、ジョージと一緒に日本へ行くことができなかったのです。だから、彼女は、バンジョーにだけでも日本を見せてあげたいと思ったのです」と喜雄さん。

一行は次に、ミシシッピ

川を越えてウエストエンドへ向かい、私も同行した。

亡くなった仲間のトランペッターのために… 遺灰を湖に撒き『朽ち果てた十字架』を演奏

そこでバンドは、4月に亡くなった仲間のトランペッター鈴木芳郎さんのために『朽ち果てた十字架』を演奏した(写真上、中央)。

「彼は本当にレイ・アームストロングを愛していたんです。私たちのもとを離れていくまで、彼は病床でレイの音楽を



聴いていました」と喜雄さん。賛美歌の最後の余韻が漂う中、喜雄さんはこの友人の遺灰をポンチャートレイン湖に撒いた。「全部じゃないんですよ」と彼は笑いながら言った。「今夜、ミシシッピ川のリバーボート・クルーズの時のために少し残しておくんです」。

湖畔で彼らと別れる前、私は、アームストロングのたぐいまれな才能の発露とされる1928年録音の名曲『ウエストエンド・ブルース』をバンドが演奏するのを聴いた。「彼のジャズ・フィーリング、スイング感、ブルース・フィーリング―それらはすべて、時代を数十年も先取りしていたんです」と喜雄さん。「ルイの『ウエストエンド・ブルース』のイントロは、ロイ・エルドリッジやディジー・ガレスピーのようなトランペッターのスタイルに道筋を付けたのです」。

外山夫妻一行と別れたあと、この日の午後は雨の予報だったことを思い出し心配になった。でも、ふっくらした白い雲が湖の上の青空を流れていき天気は崩れなかった。喜雄さんはきっと、ルイ・アームストロングがお天気も面倒見てくれた、と思っているだろうな、と私は考えていた。

サッチモ・サマーフェストが終わって彼と30人のツアーがニューオリンズを離れようとしている月曜の朝、私は彼と話をした。前の晩にサッチモ・トリビュートがあって、彼はブリザベーション・ホールに出演した。「ホールに初めて行ったのはもう47年も前のことなんですよ。いろいろな思い出が、まるで洪水のように甦ってくるんです。まったく感激、ノックアウトでした」。

今度の訪問のハイライトは？との私の質問に、とても一つを選ぶことはできないというのが彼の答えだった。

「ホントに沢山のことがあったんです」と彼。「私たちが金曜日に演奏したライブハウスの『スナッグ・ハーバー』は超満員のお客さんでした。サマーフェストの会場、旧造幣局でも同じでした。みんな本当に私たちのために熱狂してくれました。本当に温かく私たちを歓迎してくれたのです」

ミシシッピの川面にも鈴木さんの遺灰を散布 その瞬間、花火が炸裂「みんなサッチモが…」

日曜日の朝に開かれたセントオーガスチン教会のジャズミサは、彼の演奏する『この素晴らしき世界』で幕を開けた。

「みんな大喜びしてくれて、私たちも、本当に楽しい思いをさせてもらいました」。

私は彼に休みなしで4日間も活動したのだから疲れたのではないかと聞いたところ、彼はとても幸せで、寝るときも興奮していましたと答えた。

「これはハートがいっぱいの特別のジャズ祭なんです。

そして、私たちが若かったときにとっても親切にしてくれたこの街に恩返しすることが、私達も大好きなんです」と。

蒸気船「ナッチェス」号のクルーズに乗船したことについて彼に聞くと、彼の話では、乗船したはじめの頃は雨が降っていて、バンドのデュークス・オブ・デキシールランドはダイニングルームで演奏して

いたという。「そこに入るには食事を取らなければならない。それで最初、私たちはバンドのいない外に座っていたんです。とつてもがっかりしました」と彼。でも、まもなく雨がやんで、クルーズの終わりの頃には、日本からのツアーのためにはバンドが外に出てきてくれた。

「私たちも加わって、大変なジャム・セッションになってしまったんです。楽しさいっぱいで危うく鈴木君の遺灰を撒くことを忘れそうになってしまいました」と彼。思い出して、慌ててボートの反対側に回り遺灰をミシシッピ川に投げ込んだ。「遺灰が川面に降り注いだちょうどその時、対岸のアルジェから花火が打ち上げられたんです。まるで彼の魂が私たちと一緒にそこにいるかのような感じでした」と喜雄さん。

「今年の私たちの旅行はパーフェクトでした。すべて親父さん、ポップス(ルイ・アームストロング)が面倒を見てくれたんです」。

写真はすべてタイムズ・ペキューン紙電子版からのもので、小見出しと写真説明は、編集のさい添付させて頂きました。



ツアーご参加は、中村宏・美代子、磯野博子、渡邊玲子、正木日出男、佐藤修・美智子、新居誠・照子、古川博、安本仰路、飛田利勝・八栄子、真崎晃郎・美那子、神川一由、小暮弘道・裕、坂下泉、相澤美知子、堀内敬子、吉原郷之典、島田政昭、小泉良夫・富子、外山喜雄・恵子、廣津誠、松本耕司、藤崎羊一、サバオ渡辺…のみなさんでした。(順不同)

あの石巻の“女のゴ”がこんなに大きくなって！ 石巻トリコロレ音楽祭でバリトンサックス演奏

東日本大震災の翌年、2012年8月7日、外山夫妻とニューオリンズから「日米ジャズ交流」で来日した高校生とティピティナス財団の若手ミュージシャンらが宮城・石巻市を訪れ、石巻ジュニアジャズオーケストラとコラボをしたさい、ティピティナス財団から寄贈された楽器、バリトンサックスを贈られた女の子の写真を同年12月発行の「会報74号」でご紹介し、写真(写真下、右の左)も掲載した。

バリトンサックスを贈られた彼女(写真下、左の右)サイドから、このほど外山夫妻にこの写真添付のお礼のメールが送られてきた。あの背丈ほどのバリトンサックスを抱えた“あのゴ”が、こんなに大きくなって…。

＜今年8月23日、石巻トリコロレ音楽祭にて。あの日バリトンを受け取った本人。感無量！＞



石巻トリコロレ音楽祭の写真は
「河北新報」のホームページから↓



ご寄付と嬉しいお手紙 ありがとうございます

◆真崎晃郎様、美那子様(会員、浦安市) 10万円

◆長澤季利様 (福岡市) トランペット

◆田中ひとし様 (苫小牧市)

アルトサックス、テナーサックス



外山夫妻をホテルに訪ねてくれたショーンとサナエ。ショーンを、まさにあの被災後の“ドタン場”で救ってあげたのが外山夫妻。WJFとしてもこの活動を誇りに思わざるを得ませんよね、みなさん！

募集中

♪ジャズを愛する皆様
どうか会員になって下さい！！
また皆様のお知り合いの方々に
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

一般会員(General Membership) ¥6,000
学生会員(Student Membership) ¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは: WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf>

編集長から

今夏のニューオリンズ・ニューヨーク“サッチモの旅”は、例年に増しての大フィーバー、行く先々で大歓迎、サッチモ・サマーフェストでのセイントの熱演、親しい人々との再会と新しい家族との出会い
▼それらのドキュメントを地元紙タイムズ・ペキュリンのシーラ・ストラウブ記者が特集記事で報道、このツアーの初期からサポートしていただいた故鈴木芳郎さんのミッシェル・ピ川散骨も同記事内で紹介されています ▼鈴木さんは早大ニューオリンズジャズクラブOBでトランペッター。私の2年先輩で、昨年のWJFクリスマスでオール・オブ・ミシーを外山夫妻や同クラブOBと一緒に演奏させていただいたのが最後のステージとなりました。合掌 ▼8月22、23日、第9回斑尾ジャズが開催され、サッチモ・サマーフェスト2015のオフィシャルTシャツを着用してステージで司会を務めてきました。特別ゲストで参加の瀬川昌久先生も「今年のニューオリンズ・ツアーは盛り上がりつつあるので」とおっしゃっていました。(山)